



—先客万来? ゲーム開発—

スルガシステムがワシヤゲをリリース!?
その驚きの内容とは……。

著: 夏海公司
イラスト: lxy

目次

電撃文庫の作家陣が、この冊子のためだけに書き下ろした掌編を7本収録! 人気作品と「ゲーム」の融合をお楽しみください!

なれる! SE

先客万来? ゲーム開発
著/夏海公司 イラスト/lxy

3

隣の隣の華蓮さん

著/上月司

14

ラストダンジョンへようこそ

ニートな魔物と棍棒検定
著/周防ツカサ イラスト/町村こもり

29

召喚師は何回俺を異世界に呼べば気が済むの?

著/岬 鶯宮

42

メイドが教える魔王学!

~全裸のまま電源をお切りください~
著/泉谷一樹 イラスト/しゅがすく

59

リピットと僕

特別編 初めてノ旅ビトさん
著/松下彩季 イラスト/春藤佳奈

71

はたらく魔王さま!

the game! —恵美シナリオ▶continue—
著/和ヶ原聡司 イラスト/029

84



illustration/029

「ソシャゲというのが儲かるらしいじゃないか」

客先からタクシーで帰社する途中、またぞろ社長がわけの分からないことを言い出した。ちよびひげの子泣き爺がこちらを見ている。六本松建造、零細IT会社スルガシステムのトップで唯一の営業職だ。金に関する嗅覚は鋭いもののかんせん当のITに関する知識が乏しい。システム・インフラ構築が本業の会社でなぜまたソシャゲ、ゲームの話？

新米SE、桜坂工兵は考えこんだ。ひよっとして聞き間違いかと思いつね返す。

「ええっとソシャゲというのは」

「ソーシャルゲームだ、知らんのか」

間違いではなかった。

どうもまた唐突にひらめいてしまったらしい。六本松は鼻腔を広げた。

「フェイスブックやLINEでゲームができるんだらう。

友人を誘ったり誘われたりしてユーザーがどんどん増えていくとか」

「まあうまくいけばそうでしょうね」

「開発期間三日で数億稼げると聞いてるぞ。初期投資も一千万程度ですむらしい」

いや、いやいやいや。

それ情報が大分古いぞ。いつの時代の話だ。

「最近はずっと開発費上がってるらしいですよ。ブラウザゲームがすたれてきっちりアプリを作りこむみたいですから。ほら、ゲームのプラットフォームもガラケーからスマホメインに移り変わってるでしょう。端末がリッチになった分、開発の手間もかかるって」

「だから？」

「だから……いえ、そんな簡単に儲かるものじゃないって話です。しっかりしたゲーム会社が企画してようやくヒットさせられる感じだと」

「うちもしっかり企画して開発すればいいだろう」

ちよつと待て、開発する気か。

「いや、いや僕ら素人ですし」

「何が素人だ。あれだけエンジニアが揃ってるんだぞ？」

ゲーム開発と企業のシステム構築は違う。現場から見れば当たり前の話がどうにもこの経営者には伝わらない。六本松は不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「やる前からダメだと決めつけるのは感心できんな。いつも言っているだろう、大切なのはチャレンジスピリットだと。まずは取り組む、頑張ってみる。それでダメなら次の手を打てばいいだけだ」

「ま、まあ気持ちはいつでもチャレンジングですけど」

作品紹介

とあるシステム開発会社に就職した桜坂工兵。彼の教育係についたのは、どう見ても十代にしか見えないが、やたらとスパルタな少女で!? 入社早々の無茶振りの嵐をかくぐりながら工兵は奮闘する!

システムエンジニアの過酷な実態をコミカルに描く、萌えるSE残酷物語!



室見立華

実力のあるネットワーク系のSEだが十代にしか見えない少女。実年齢不詳。四六時中仕事をしているワーカーリック。新人である工兵の上司でもある。



桜坂工兵

知識も経験もないシステム開発会社に就職した社会人一年生。無茶振りともいえる仕事をなんとかこなしながら、教育係である室見のもとで激務に追われる日々。



六本松建造

立華や工兵が所属するスルガシステムの社長。コネを駆使して営業をかけ、現場の状況を気にせず仕事を取ってくる困った人。人の名前をいつも間違える。



姪乃浜梢

スルガシステムの運用担当部署、OS部に所属。佇まいも性格も小動物系だが、ストーカー気質あり。室見とは犬猿の仲。工兵に好意を持っている?

現実問題、時間が足りない。今月の稼働率は二百%を突破、残業時間も優に百を超えている。こんな状況で追加の取り組みだ、頑張りだと言われても虚しいだけだった。だが正面きって否定すれば反発するだけだろう。なるべくオブラートに包んでけむにまこうと決める。

「なるほど社長、前向き且つ将来を見こした姿勢に感服しました。ただ、今繁忙期でみんな立てこんでますし少し落ち着いてからまた検討しませんか? 来月になればいくつか大規模プロジェクトも終わりますし」

「む、いかん、もうこんな時間か。そういえばB社さんから折り返しの電話を求められとった」

「……………」

相変わらず都合のよい時に用事が出てくる人だ。

「ああ六本松です。〇〇さん? はい、お待たせしました。がはははは!」

声がかい、そして話が長い。車内に轟く大音量にひたすら耐えているとしばらくして車が停まった。左手に見慣れた自社オフィスが見える。

「おう、ついたか。というわけで桜崎君、さっきの件よろしく頼むぞ。まずは企画書を作成してメールで共有してくれ。今週中くらいにな」

「え、いやそれは流石に」

「もしもし、すみません。はい、週末のラウンドの件ですな。全然大丈夫です。いや最近仕事が少なくてお声がけいただき幸いです。是非一緒に来期の話をさせてもらえればと。わっはっは！」

いつものように人の名前を間違え、いつものように仕事をぶん投げ、社長は去って行った。慌てて追いつがると背後から「あのお」と声がけされた。タクシーの運転手が不安そうに目をしばたいたいている。

「料金、現金払いでよろしいですか？」
メーターには三千円と表示されていた。

「それで？ あんた黙って引き受けてきたの。このクソ忙しい時期にゲームの企画とか」

小柄な少女が柳眉を逆立てる。腰まで伸びた長い髪、大ぶりの鳶色の瞳。人形のごとき造作は、だが仁王像もかくやな殺気を放っている。回答次第では手に持ったノートPCを投げつけてきそうだと。

「し、仕方ないでしょう、まさかタクシー料金踏み倒すわけにもいきませんし、オフィスに戻ったら社長もうちの打ち合わせに入ってしまったから」

「殴りこみなさいよ」
「首になります！」

いくらなんでも進退を賭けてまで突っこむ話じゃない。というかこの種の無茶振りでいちいち反発していたら首がいくらあっても足りなかった。

少女——教育担当にして直属の上司、室見立華は舌打ちした。傍若無人なネットワークスペースヤリストも一勤め人であることに変わりはない。社長の決定に正面切って逆らうつもりはないようだった。忌々しげな面持ちで自席を回転させる。

「で何？ ゾルゲだかソマリアだか知らないけど本当に儲かるものなの？ それ」

「ソシャゲです。って知らないんですか？ ソーシャルゲーム」

「知らない。自慢じゃないけど私のゲーム年表はペ〇ゴで止まってるわ」

昭和すぎる。本当いつの時代の人なんだ、この上司。

「簡単なネットゲームですよ。SNSの画面やアプリでプレイする。まあ新聞とか読む限り一昔前はぼろ儲けだったみたいですね」

「ぼろ儲け」

「手軽に作れてプレイ人口も多かったですから。ほら、フェイスブックやってる人の一割が遊ぶと考えるもすごい数でしょう？ その人達がお互いに競い合って追加プレイのク

レジットを購入したら」

「確かに、すごいことになりそうね」

主要なSNSのユーザー数は数億規模になっている。うち一割と考えると数千万人だ。一人、十円課金でも莫大なリターンが期待できる。

室見の細い首が傾いた。

「ただ、手軽に作れると言ってもコンピュータゲームでしょ？ 新参の会社がほしい開発できると思えないんだけど。いくら実入りがよくなったって開発費が高騰したら意味なくない？」

「いや、それが本当に簡単なシステムでよかったですよ。目指している方向性がゲーム性より交流、やりこみよりひまつぶし用途だったんで。……そうですね、極端な話、ジャンケンでもOKだったんです」

「じゃ、ジャンケン？」

「もちろんソシャゲ用に飾り立てる必要はありませんけどね。たとえば勝負に勝つとゲーム内コインがたまっただ額で福袋を購入できるとか。で、福袋の中にはランダムなアイテムが入っていて勝負を有利にできる」

「アイテム」

「一回に限りグー・チョキ・パーの内二つを同時に出せるとか、負けても身代わりが砕け散るとかそういうやつ

ですね。で、普通はちまちまコインを貯めないでだめですけど課金すると一気に獲得量を増やせるとか」

「あんた、やけに詳しいわね」

まあ一応趣味はゲームだし、何より自分達の世代はパリのSNSユーザーだ。代表的なソシャゲのシステムは理解している。

「他にもプレイ回数を時間単位で制限して解除を有料にするとか、または特定アイテムの発生確率を低くして福袋を大量購入させるとか色々やり方はありますよね。アイテムを女の子のキャラクターカードに変えてその画像目当てな人を釣ったり」

「ごめん、やっぱりよく分からなくなってきた」

いかに、少しマニアックすぎたか。ソシャゲと課金の話題は重い。人間の欲望と見栄、お金の要素がダイレクトに入り交じってくる。未経験者にはなかなか理解しづらい世界だ。「とにかく」と話を戻す。

「二世世代前のソシャゲは比較的作りやすかったんですよ。単純なジャンケンやルーレットで客がつくくらい。グラフィックも静止画でよかったですし、音楽だって最悪なしでも」

とはいえコンピュータのプログラムだからそれなりの開発スキルは必要となる。ネットワークエンジニア(見習い)

の自分には随分畑違いな領域だ。

まあ偉そうなことを言っても結論は同じか。「新参の会社がほいほい開発できると思えない」、まさに室見の言うとおりのだ。嘆息して会話を打ち切りかけると。

「そんなに簡単ならもう作って公開しちゃえばいいじゃない」

「は？」

予想外の提案が返ってきた。

室見がしかつめ顔でノートPCを操作している。タッチパッドとキーボードを駆使し画面を切り替えていた。

「見たところソーシャルアプリってJAVVAやオブジェクトタイプCで組めるみたいだし。ジャンケンプログラムくらいなら一時間でできあがるわよ。どうせ企画書作っただけであれこれ注文つけられるんだし、だったら実際に品物作って現実を思いしらせた方が早いでしょ」

「現実」

「素人の作るゲームなんて商売にならない」

確かに、机上の空論より一の実証。やる気だチャレンジスピリットだと明後日の方向から責められる前に結果を示してしまうべきか。市場の冷淡な反応を前にしては社長も黙らざるをえない。うん。

「じゃあやっちゃいますか、えっとゲームサーバはどう

します？」

「データセンターの検証環境使わせてもらいましょう。適当な仮想サーバにApacheのつけてDBはMySQL使えばいいでしょ。フィールドはユーザーIDにコイン、あとなんだっけ、所持アイテム？」

喋っている端からシステムを構築していく。早い。さすがスルガシステムきつての敏腕エンジニア。専門外の内容もほとんどんきゃッチアップしていつてくれる。一か月くらい猶予を与えれば本当に大作ソシヤゲを作ってくれそう

だ。

室見がタッチタイプを止め振り返ってくる。

「絵はどうする？ ジャンケンの手とかアイテム、あんだ描く？」

「ぼ、僕、絵心なんてありませんよ」

「別に下手でもいいでしょ。何を示しているか分かればいいんだから、ほらこんな感じで」

ペイントツールを立ち上げ描画し始める。二つの長い耳を生やした奇怪な生物がキャンパスに現れていた。なんだこれ？ ウサギ型の敵キャラか。

「チョコキよ」

「……………」

ジャンケンの手だったらしい。室見立華、技術はともか

く芸術的なセンスは持ち合わせていないようだ。だが本人的には会心の出来だったのか、鼻息荒く胸を張る。

「うん、いいわね。なかなか特徴を捉えた感じ。絵なんて小学校以来だけど結構いけるものね。自分の才能が怖いわ」

「僕は室見さんのその自信が怖いです」

「よし、他のイラストも私が描くわ！ 桜坂、アイテムの内容教えて、あとさっき言ってたキャラクタカード？のイメージもあれば」

こうなるともう止められない。やる気という燃料に点火したロケットのようなものだ。全て燃焼しきるまで飛び続ける。方向を変えられなくなる。

(まあどうせ一、二時間の話か)

一通り作り終えれば熱も冷めるだろう。見た限りイラスト一枚、一分もかけず描き上げてようだし。

「ゲーがこれで、パーがこれで、身代わりアイテムはぬいぐるみのイメージにしましょうか。で、福袋は宝箱っぽいテキストをくわえて」

邪魔しちや悪いと思いい自席に戻る。待っている間にPC起動、ゲームの登録・公開方法を調べてみた。ふむ、プラットホームによって大分違うな。さしあたり一番手軽そうところにするか。でタイトルは。

「……………じゃんけんゲームでいいか」

どうせあつというまに消え去るタイトルだ。変に凝っても恥ずかしい。一応検索しやすいように「スルガシステムの」と頭につけておく。

スルガシステムのじゃんけんゲーム。

目眩がするほどださいタイトルだ。人間、投げやりになると少々のセンス悪化は許容できるらしい。とりあえず社長向けの申請メールに大きくゲーム名を記しておく。「さっそくプロトタイプができそうなので市場調査も兼ね公開させてもらえませんか。ちなみに△SNSで登録料は〇〇円、売り上げのバックは〇〇%だそうです」と。

送信。

OK、あとは室見の作業完了を待てばいい。思ったより早く懸案が片づいた。いや、正確には何も片づいていないが少なくとも目処はついた。これで安心して仕事に戻る。肩の力を抜いて今日の客先打ち合わせの議事録を作成し始める。その時はもう本当にこれで終わりだと思っていた。

一週間後、「スルガシステムのじゃんけんゲーム」は△SNS、ゲームランキング一位になっていた。

……………は？

何が起きているか分からずスマホを見つめ直す。いや、



そろそろ公開されているはずだから記念にダウンロードしておこうと思ったのだが。普通にタイトルを検索しかけて、検索ボックスをタップしようとして直下のリストに気づいた。スルガシステムのじゃんけんゲーム、トップ、ランキング一位。

「いや、いやいやいや」
あんなインスタントゲームがどうして、ひょっとして似た名前のソフトが他にあったのか。目を皿にして確認するも、だが見間違えではなかった。ランキングに入っているのは確かに自分達の作品、じゃんけんゲームだった。(な、なんで)

悪い夢でも見ているようだった。タイトル名をグーグル検索、掲示板やレビューサイトの原因を調べまくる。ややあって震源地と思しき記事にたどりついた。

『謎の怪物、製作意図不明のホラーじゃんけんゲーム』
著名なアプリ紹介サイトだった。記事の更新日は昨日、既にかかなりのアクセスがあるのかツイッターの共有数も千を超えている。仰々しい煽り文句にレビューの本文が続いていた。

『製作会社は(株)スルガシステム、企業向けの情報システム・インフラを提供しているらしい。そこが何を思っ
てこんなゲームをリリースしたのか、まったく分からない

い。謎である。いや謎と言えばゲーム全体が不思議極まりない。システム自体はシンプルなジャンケンだ。しかし出てくる画像がごとごとくホラーである。少なくともグーはグーに見えない、形容のしようもないがあえて近いものを上げれば髑髏だろう。片側がやたらと歪に広がったされこうべ。なぜ? 知るものか。ちなみに途中に出てくるアイテムもことごとく前衛芸術である。何かアメリカのようなものを入手したので名称を確認するとぬいぐるみだった。果たしてこの作者は本物のぬいぐるみを見たことがあるのだろうか?」

予想外のコメントがついていた。ホラー、ホラーときたか。
ツイッターの共有からリンクを確認してみる。こちらはこちらでもっと赤裸々な声が流れていた。
『マジこええ。音楽がないのに勝負で勝ったときだけ断末魔の悲鳴が聞こえてくる。あと時々響くラップ音何? 呪わてるの?』

『レアアイテム使ったらウサギの化け物みたいなのがたくさん出てきたんだけど、技名がチョコキ乱舞。もちろん相手がグーを出したら全負けする。つつこみどころが多すぎてコメントが追いつかない』

『おい、クトゥールの邪神みたいなカードに「ヒロイン(美

少女1」って書いてあったぞ！ どういうことだ！」
 他にも「やべえ、なんか課金したくなってきた」「もつ
 とこのイラストを見てみたい」「落ち着け、SAN値が
 下がってるぞ」という反応が流れている。

すっかりネタゲーとして扱われていた。主に室見のイ
 ラストのせいだ。

呆然と立ち尽くしていると自席の内線が鳴り響いた。
 発信者は運用部の同僚、姪乃浜梢^{めいのみはなほ}。

「桜坂さん、ちょっと困ります！ なんとかしてください！」

受話器を上げるなり切迫した声が響いてきた。大規模
 障害中ばりにぴりぴりとした空気。

「ど、どうしました？ 一体」

「どうもこうもありません！ DCの検証環境、ものす
 ごいアクセスが来て回線・CPUともに上限張りついて
 るんですけど。他のテストが全部止まっちゃってます
 よ！ 何やってるんですか!？」

「何って」

一瞬考えた後、理解する。そうだ「スルガシステムの
 じゃんけんゲーム」は検証環境で動いているのだ。どう
 せ大したアクセスもないだろうと他システムに間借りさ
 せてもらっていた。回線と物理サーバをシェアさせても

らっていた。想定外のヒットでそれらのリソースが食いつ
 ぶされているのか。

「仮想サーバ落としますよ！ いいですね!？」

「い、いやそれはちょっと」

ただでさえ話題沸騰中なのだ。ここでダウンさせたら更
 なる都市伝説を生みかねない。

「ちょっと室見さんに相談してみますから、もう少し時間
 をもらえますか。すぐ折り返しますので」

「そんな余裕は」

鳴り響く携帯の音。社長からだ。「ごめんなさい」と謝
 罪し電話に出る。

「はい、桜坂の携帯です」

「おう！ 例のゲーム、ヒットしたらしいな！ どうだ私
 の言った通りだろう、チャレンジなくして成功なしと」

え？

「な、なんでそれを」

今の今まで自分も知らなかったのに。六本松は「ふふん」
 と笑った。

「総務の方に色々問い合わせが来てるらしいぞ。「じゃんけ
 んゲームを作ったのは御社ですか」「開発の背景を取材さ
 せてもらえませんか」とな」

「取材……」

さて、自分は一体いつSEの業務に戻れるのだろうか。

*

後日、一通のメールを受け取った。

差出人に見覚えはない。はて、顧客の担当者変更だろう
 かと思いつく。サブジェクトは——取材協力をお願い。

「貴社六本松社長からご紹介いただきました。今話題の「ス
 ルガシステムのじゃんけんゲーム」について開発経緯やエ
 ピソードなどを教えていただけませんか。内容につ
 いては弊社ゲーム雑誌の九月四日号に掲載する予定です」

署名欄には電撃PlayStation編集部の記事があった。

(二〇××年七月三十一日 文責：桜坂工兵)

らね！」

「ちょっと桜坂！ 今社長からソシヤゲの第二弾作るよ
 う言われたんだけど、どうということよ！ あんたまた追
 加の仕事受けてきたの!？」

室見が血相を変えてオフィスに飛びこんできた。耳元
 では「止める」「落とす」と呪詛のようなつぶやき。内
 線と眼前の上司に「いや」「その」と答えながら軽い目
 眩を覚えた。

「それにしてもゲーム機ですか。簡単にくれるだなんて、随分と太っ腹ですね」

「うーん……倉庫で埃を被っていたみたいだし……それに、PlayStation 2だからかな」

もう世の中では4が出ているのに、未開封の2を欲しがる人なんて、こんな田舎町では誰もいなかったからだ

何度も見比べて、

「急にゲーム機だなんてどうしたんですか、シロさん？ わたしへの誕生日プレゼントにしては、少し早いですが……」

「や、そういうんじゃないわね。昨日さ、商工会の人に頼まれて納屋の整理を手伝ったんだけど、そのお礼に……」

「なるほど、分かりました。つまりこれは、貢ぎ物ですね？」

「全然違うけど……まあいいや」

普通に僕が貰った物ではあるけど、一人じゃゲームなんてやらないだろうし、華蓮さんがうちに来るとも思えなかつたので持ってきたのは事実だ。

ちなみに華蓮さんは、史朗（あき）という名前の僕のことを「シロさん」と呼ぶ。小さい頃からずっとこの呼び方で、同じように呼ぶ人も結構いる。

「それにしてもゲーム機ですか。簡単にくれるだなんて、随分と太っ腹ですね」

「うーん……倉庫で埃を被っていたみたいだし……それに、PlayStation 2だからかな」

もう世の中では4が出ているのに、未開封の2を欲しがる人なんて、こんな田舎町では誰もいなかったからだ

「れでい×ばと!」『アイドル≡ヴァンパイア』の
上月司が贈る、オリジナルストーリー!

隣の隣の華蓮さん

人生、いろいろ。
ゲームも、いろいろ。
今日も華蓮さんとまったりゲームです。

著：上月 司

僕の暮らしている町は、かなりの田舎だ。小中学校は全校生徒が三十人足らずしかない分校だったし、今通っている高校に行くには自転車にバスに電車にと乗り継いで、往復四時間はかかる。

そんな田舎町なので近所付き合いはかなり親密だけど、中でも一番親しくしているのが、隣の、もう一つ隣の家に住む、二つ年上の華蓮さんだ。

高校には行かず、一日の殆どを家の中で過ごしている華蓮さんに、僕はなるべく会いに行くようにしている。

そして今日は、プレゼントを抱えて華蓮さんの元を訪れていた。

「ゲーム、ですか？」

そう聞き返してきた華蓮さんは、いつも通り着物姿で居間にいた。春や秋は縁側にいることが多いけど、夏の間は冷房を入れるので主に居間にいる。

長くて艶やかな黒髪に、泣き黒子とおっとりとした目、それに紫陽花柄の着物がとても良く似合っていた。平安時代を舞台にしたドラマから抜け出してきたような、古風な美人さんだ。

涼しい部屋の中でお煎餅を食べながらテレビを見ていた幼馴染みのお姉さんは、僕の顔と、腕に抱えた大きな袋を

と思う。

それでも、気前が良いっていうのには変わりないけど。予備のコントローラーやメモリーカード、あと一本だけだけどソフトもくれたし。

「それで、なんというゲームなんです？」

「えーっと……『EX人生ゲーム』、だって」

「人生ゲーム……どこかで聞いたことがある気がします。どこででしょう？」

「ほら、集会所や分校にあったやつだよ。あの、ルーレットを回して、車に棒みたいなのを刺して移動させるやつ」

「ああ……そういういえばありましたね。何度かやった覚えがあります」

懐かしそうに頷く華蓮さんと一緒に、僕もかなり感慨深かった。年下に人生ゲームが好きな女の子がいて、せがまれて何度もやった記憶が蘇ってくる。

僕は説明書を見ながらゲーム機をテレビと繋げて、セッティングしながら、

「それで、華蓮さんと一緒にやろうと思ったんだけど、どうかな？」

「仕方ありませんね。一人でやってもつまらないでしょうし、ここはわたしが胸を貸しましょう」

そんなことを言っって薄い胸を張る幼馴染みに苦笑しつ

つ。
僕は華蓮さんと一緒に、初めて手に入れた家庭用ゲーム機で遊ぶことになった。

「さてと……どう進めればいいんだろう？」

僕は新品のコントローラーを両手で握りしめ、たどたどしく操作していきながら、

「ええと、いくつかモードが選べて……一番オーソドックスなのは……」

「シロさん。ちよつと良いですか？」

床に広げて置いた説明書を読みながらの僕に、何もしていないけどしっかり両手にコントローラーを握った華蓮さんは、

「説明書は分からないことがあった時に読むことにして、とりあえずは適当にやってみませんか？」

「うーん……それでもいいけど、分からないことだらけだと思ふよ？」

「やっていく中で学んでいけばいいんです。借り物で使える期限が決まっているのならともかく、何度でも出来るんですから」

のんびりとした華蓮さんらしい意見で、そう言われると僕としても拒否する理由がない。

バスを一本乗り過したら一時間は余裕で待たされる田舎育ちだし、気長にやるのは慣れてるし。

「じゃあ、ひとまず流れでやっていくとして……最初だし、普通のわいわいモードでいいよね？」

「ええ、大丈夫ですよ」

「これで……つと、次は参加人数の選択かあ。四人まで参加出来るけど……」

「二人しかいないのに、ですか？」

「うん。その場合はプレイヤー二人に、コンピューターが二人でやるみたいだよ」

「なら、わたしとシロさんだけでやりましょう。コンピューターを入れて、それが勝っても面白味に欠けますし」

確かに、何も分かってない僕らをよそにコンピューターがすすい進めて行っても、ちよつと微妙な気分になる。

こういうパーティーゲームは複数人でやった方が楽しいとはいえ、コンピューターが混ざっても、余計な感じがするし。ただまあ、人間四人でやるとしたら近くにゲームに興味がありそうな年頃の子供は住んでないので、セミリタイアしているお年寄りを集めるしかないけど。

「プレイヤーは二人だけ、つと……あれ？　なんか家系図とか出てきたけど……」

「シロさん、こういう時こそ説明書です！」

「……うん」

やっぱり説明書を読みながらの方が早かったんじゃないかなあ、と思いつつ調べてみると、すぐに意味は分かった。

「どうやら自分で作ったキャラクターを、家系図にセーブ出来るらしい。ゲーム中に結婚して子供が出来たりしたら、それも保存されていくとか。」

「要するに、自分のキャラを作成してセーブ出来る、つとことらしいよ。あと、プレイ記録も残るって」

「なるほど、分かりました。それではわたしの方から家系図を作ってみますね」

「うん、分かったよ。まずは名前を入力して、それから顔や服装とかを選んでいって作るんだって」

「折角ですし、なるべく自分に似たキャラにしたいですね……まずは目からいきましようか」

「そうやって、華蓮さんはキャラクターメイキングを始めた。表情は真剣そのもので、まだゲームを始める前からクライマックスの雰囲気が出ている。」

僕も隣に座って、どんなパーツがあるのかと興味深くテレビ画面を見る。

「髪型は……全体的にはこれでいいんですが、前髪が少し気になりますね……」

「……」

「ううん……もつと唇は淑やかな笑い方のものもいいですね……」

「服装はいつも通り着物を……あつ、でも、ここは都会風なアレンジをしてみてもいいかもですね。そうすると髪型も……」

「……」

「……」

「ふう、完成しました。我ながらとてもいい出来です」

「……うん……良く出来てるね……」

その代償として三十分近い時間が経過していて、僕は何もしていないのになんか疲れてしまった。

途中何度か「それでいいんじゃない？」ってそれとなく完成を早めようとしたけど、ガン無視されたし。集中して気付いてないだけだったんだろうけど。

僕の憔悴っぷりにもまるで気付いていないようで、華蓮さんは満足げに頷くばかりだ。

「そうでしょうそうですね。さあ、次はシロさんのキャラクターですよ」

「うん……」

促されてコントローラーを握るものの、あれだけ時間が掛かったのを見た後だと、なんかもうどうでもいい感じだ。性格とかも選べたけど、頭が考えるのを放棄して、ノータイトムで『真面目』にしちゃったし。

キャラクターもそのままでもいいかな、と思いつつなんとなしに作成画面に進めると、

「あれ……『おまかせ』なんてあるんだ？　じゃあこれでもいいかな」

「本当にいいんですか？　後悔しませんか？」

「うん、別にいいよ。あんまり長くかかると夕飯の時間になっちゃいそうだし。一度で決めちゃうね」

全然自分とは似ていなくても、やっていけば愛着も湧くだろうし。なんだったら、また今度やる時に作り直してもいい。そう思って、僕は気楽に『おまかせ』のボタンを押した。

すぐにキャラクターが変化し、出て来たのは——アフロヘヤーで青い肌の、気色悪い男だった。

「まあ、シロさんそっくりですね」

「一欠片も似てないよ!?　ていうか、何これ?!　完全に宇宙人だし！」

「それこそシロさんの内面を映し出した真の姿です。幼馴染みのわたしには分かります」

「アフロなんてはっちゃけた本性してないって……流石にこれは作り直しを……」

「駄目ですよ。武士に二言はありません。宇宙人も同じくです」

「……………」

格言に余計な一文を加えられ、もう変更は出来ない流れになった。

そんなわけで、華蓮さんは本人を忠実に再現した、黒髪和服美人の『かれん』で。

僕は性別以外何一つとして被っていない地球外生命体の『しろ』でのプレイをすることになった。

僕も華蓮さんもボードゲームのオーストリアな『人生ゲーム』はやったことがあるけれど、このテレビゲーム版『EX人生ゲーム』はいくつか違う点があった。

普通の『人生ゲーム』は順番にルーレットを回してその出目に従ってキャラクターの乗った車を進ませ、止まったマスに書かれたイベント通りにお金を貰ったり払ったり、時には進んだり戻ったり、場合によっては一回休みになったりとしながらゴールを目指し、最終的にトータル資産が一番多いプレイヤーの勝利になる。

要は双六で、違うのは途中で就職したりギャンブルした

りしながら資産を増やしたり、結婚して子供を作れたりするところだ。

この『EX人生ゲーム』もルーレットを回したり基本的なところは一緒だけど、違う部分がいくつかある。

まず、始める年代を選べることで、追加のマップがあること。とりあえず最初なので一番若い赤子から、追加マップは無しでやってみることにした。

そして他にも色々違いはあるみたいだけど、何より一番の違いはステータスがあることだろう。『知力・体力・センス・モラル』の四つのステータスがあるから、これを伸ばしながら進んで行くらしい。

で、どうやって伸ばすのかというところ……

「じゃあ回しますよ……えいっ」

「華蓮さん、もう一回ボタンを押してルーレットを止めるんじゃないかな？」

「そのようですね。それでは今度こそ……えいっ」

気合い十分で華蓮さんが出した数字は……7だ。1から8までしか無いことを考えると、かなりいい数字だと思う。

「ふふ、幸先はいいみたいですね。それでは進ませて、と……」

「星のマークのマスに止まったね。『よろこびマス』っ

て言ってるから、たぶんいいことが起こるんだと思うけど……」

「……何やら犬とワンワンで会話をして、知力とセンスとモラルが上がって、さらに『犬会話』という技能を手に入れましたけど……これ、どういう意味なんでしょう？」

「たぶん考えたら負けなんじゃないかなあ……」

正直ちっとも意味は分からないけど、そんな気がする。これに深い意味を求めたら駄目なんだと。

「じゃ、次は僕の番だね」

画面が切り替わったので、ボタンを押してルーレットを回す。一応8を狙って押してみたけど、全然違う5で止まった。

しかもこれは華蓮さんの止まったマスと違って水滴みたいなマークの青いマスだ。

「これ、マイナスのマスなのかな……」

「『かなしみマス』、と言ってますね」

「うん。ステータスが落ちるか、お金が減るかするのかな」ちなみに所持金は初期で一千万円あって、どう考えても赤子が持つ金額じゃない。この辺も考えたら負けなんだろう。

画面では僕とはちっとも縁の無さそうなアフロの宇宙人赤ちゃんが迷子になっていて、母親らしき人影を二つ見つ

け、どちらかを選べと選択肢が出た。

考えてどうにかなるとは思えなかったので、僕はロングヘヤーの人影の方を選んでみた……けど……

「なんか……シルエットと全然違うヘンなおじさんが出て来た……」

「……SMの女王様の格好でしょうか……おじさんですけど……」

しかもこれで知力が下がった。どちらかというところも下がりがりそうなものなのに。

本格的に意味が分からないけど……少し間を置いたら、あまりに馬鹿馬鹿しくてつい笑ってしまった。

一つ一つのイベントは短いし運任せだし意味も分からないけど、なんだか楽しい。何が起るか予想が出来ないって意味でも退屈はしなかった。

十年以上も前のゲームなのに凄いなあ、と僕が感心していると、次のターンになって華蓮さんの番だ。

今のところルーレットを回す以外にやることはないの、華蓮さんは「それっ」と声を出しながらボタンを押し、出た目は……

「今度は8かあ。この引きの良さは何なんだろう」

「これが日頃の行いというやつですよ。お天道さまに恥じない生き方をしていれば、自然とこうなるものです」

凄く偉そうに言うけど、引き籠もりが言っているいいセリフじゃないと思う。

ともあれ、8マス進んだ「かれん」が止まったのは、緑色のカードが描かれたマスだった。

「カードマス、ですか。このスロットで止まったカードが貰えるということですね？」

「うん、そうだと思うよ。でも、狙って引くのは無理っばいね」

縦に回転しているスロットにはカードの名前が書かれているけど、僕の動体視力じゃ何となく書かれた文字が分かる程度。何とか狙って押しても、スロットだからいくつかわずれてしまうだろうし、これもやっぱり運任せだ。

難しい顔をして画面を見つめていた華蓮さんもそれを理解したらしく、

「なら……ここですっ」

それでも狙えるだけ狙ってボタンを押し、スロットを止めた。

いくつかずれて止まった枠に書かれていたのは……「ゲームカード」だ。

「むう……『お金持ちカード』とか『石油カード』とかが欲しかったんですが、仕方ありませんね」

「どんなカードなんだろうね？ あと、たぶん華蓮さんが

欲しがってるカードはないと思うよ」

「世知辛いですね。もっと夢があってもいいと思います」

やれやれです、とお茶を飲む華蓮さんだけど、それは夢があるというより夢見がちなだけだと思う。

まあ言っても無駄なので言葉にはせず、順番になったので僕もルーレットを回した。今度は何とかよろこびマスに止まれたけど、パパとママのどちらが好きかを選ばされてステータスが上がるという、もう理由なんてどうでもいいんじゃないかなと思える展開だった。

それからさらに一回ずつルーレットを回した後の、4ターン目。

華蓮さんが出したルーレットの目は6で、進んで行く途中でマップの奥にあった「入学」の門の中へ入っていく。

「おや、画面が変わりましたね……イベントでしょうか？」

「そうみたいだね。小学校に入学するみたいで……あ、順位に応じてお金が貰えるみたい。いいなあ」

「この段階では5000万円というのがどれくらい価値があるのかちょっと分からないですね。使い道もないですし」

「マスにショップとかあったし、何か買えるんじゃない？」

あ、1組か2組か、入るクラスを選べって」

「よく分からないので、1組にしておきましょう。これからは小学生ですが……あら？ まだ続みたいですね」

華蓮さんの言う通り、クラス選択してセンスがちょっとだけ上がった後で新しいマップが出て来て、そこを進んで行く。またよろこびマスに止まり、体力とセンスがアップする。

「赤ちゃんから小学生になっても、基本的にやることは変わらないみたいだね」

「ですがこの先、道が二つに分かれていますよ？ 合流先は同じように見えました、これは一つのポイントなのかもしれませんね」

「僕も早くそっちのマップに行きたいなあ。ルーレットで7以上出れば……っと、8だ！」

「むっ。随分と差を縮められてしまいますね……」

少し表情を引き締める華蓮さんは、この運任せのゲームに凄く本気だ。まあ、僕もルーレットでいい目が出たらかなり嬉しかったので、徐々にこの意味の分からない双六ゲームに嵌まり始めているのかも。

ともあれ、画面では「しろ」も小学校に入学して、3000万円をゲット。クラス選択になったので、ここは華蓮さんと別の2組にしておいた。

「ここから僕も小学生マップだし、頑張っただけで追いついて行きたい……ところなのに、いきなりかなしみマスに止まってしまった。雨の中で『子供はかせの子!』と言っていたら風邪を引くというベタなイベントが起こり、体力とセンスが減る。」

「うーん……ステータスが伸びるどころか、センスは最初より低くなってるなあ……」

「シロさんはモラルだけ高いですね。わたしは何故か知力とモラルが低いですが、この先の展開次第で……あら? 何かイベントが始まりましたよ?」

「うん……『クラス対抗大運動会』だって」

華蓮さんのターンが始まるかと思ったら、急に場面が切り替わってイベントがきた。たぶん、プレイヤーが全員入学したら始まるイベントなんだろう。

画面では「かれん」を含む四人が大縄跳びに挑戦しようとしていて、

「ふむふむ……タイミングよく○ボタンを押してジャンプすればいいんですね。なるほど、簡単です」

「シンプルで分かり易いね。五十回跳んだらパーフェクトだっていつてるから、そこ目指して頑張って」

「おや、敵に塩を送る発言とはシロさんも余裕がありませんね。ですがありがたく、パーフェクトで片付けてあげ

ましよう……では、いきますよ」

どこから溢れ出ているのか自信が漲っている華蓮さんは、コントローラーの○ボタンを押して、イベントがスタート。

画面では大縄跳びの縄が動きだし、「かれん」を含む1組の四人の足下へと回ってきて、

「今です、それっ!」

なかなか良いタイミングで声を上げる華蓮さん……だけど。

「……………あ」

「……………え?」

悲しいことに画面で「かれん」が跳ぶことなく、足に縄がぶつかり失敗していた。

コントローラーを構えたまま華蓮さん呆然として、

「……あ、あの? わたし、ちゃんと押しましたよ? なのに跳ばずに……えっ?」

「あ……もしかして、思ったより早いタイミングで押さないといけないのかな」

「そんなの聞いてませんよ?! というか、ボタンを押すタイミングで合図も何もなかったですし……何ですか、これ……!?」

愕然とした表情のままブリーイングをする華蓮さんの気持

ちは分かるけど、そうしている間に自分の番になったので、僕は気持ち切り替えてコントローラーを握る。

さっき見ていた感じだと、自キャラ以外の三人も跳んでいたから、それに合わせれば上手くいくかもしれない。

初見じゃないアドバンテージを活かそうと僕は画面に集中し、大縄跳びの縄が下へ回り、他のキャラ達が跳んだタイミングですぐにボタンを押す。

「ああっ!? どうしてシロさんは成功するんですか……?!」

「さっき見てたからだけど……よっ……と……あれ、もう引っかかっちゃった」

七回跳んだ辺りで縄が足にかかり、失敗になる。でもまあ、結果が出るのを待つまでもなく、「かれん」がゼロで「しろ」が七で、僕の勝ち。

勝ったご褒美としてステータスが上がったので、ほくほく気分で見ると……なんか凄く恨みつらみが籠もった目で、華蓮さんが僕を見ていた。

「……後攻めで勝ちを攫うなんて、卑怯です……全然親切じゃないですし、これが噂のクソゲーというやつですか……」

「こ、こういうゲームなんだって思えば楽しいよ?」
「そんなの勝った人だから言えるセリフです! もう、

絶対に最後に笑うのはわたしですからね……!」

啖呵を切った華蓮さんはコントローラーを掴み、本気目でルーレットを回す。また大きな数字が出てよろこびマスに止まるけど、口の中で小さく「よしっ……!」って言ったし。

普段はおっとりりのんびりで日向の縁側でうつらうつらしている姿がよく似合っているのに、どうしてこんなことに開けてはいけない扉が開いた感じがする。

「ん……『かれん』と『しろ』で遊ぶのですか。リカちゃん人形かチョコQレースで……やはりここはレースですね……」

「……あの、華蓮さん? どうしてそんな、戦闘モードに……?」

「勝者は一人だけです、蹴落とし合うのが世の常なのです……ああっ、どうしてわたしだけでなくシロさんのキャラまでステータスが上がるんですか?! そんな余計なことしないでいいのに……!」

「……………」

どうやら僕の知っている華蓮さんはどこか遠いところに行ってしまったらしい。

なんだか切ない気分になりながら、順番が来たので僕もルーレットを回す。二つに分かれた道を、何となく華蓮さ

んとは逆の方を選んで進むと、カードマスに当たった。どんなカードがあるのか分からないし、狙える訳でも無いので適当にボタンを押してみると、いくつか進んでスロットが止まる。

「……『悪魔カード』って、なんか変なの引いたなあ……」

「前にネットで実況動画とやらを何度か見ましたが、違う双六ゲームだと引いた瞬間に悪魔がやってきて呪われるカードでしたよ。シロさんも年貢の納め時ですね……！」

「だから何で僕が悪役っぽい扱いなのさ……それに、普通に華蓮さんの番になったよ?」

「むっ……おかしいですね。これはあのゲームとは違うタイプの『悪魔カード』なんでしょうか……」

ぶつぶつと言いながら、華蓮さんはルーレットを回そうとし……ふと、何かを思い出したように「その前に」と呟く。

「わたしもカードマスで何やらカードを手に入れてましたね。あれを使ってみることにしましょう」

「ああ、『ゲームカード』だっけ? どういう効果があるのかな」

説明書を見ようかとも思ったけど、その前に華蓮さん

がコントローラーを操作し、「ルーレット」のところから下にスライドさせて「カード」の項目でボタンを押した。

持っているのは一つだけなので自然と「ゲームカード」にカーソルがいき、横に出た説明を読んでみると……

「ああ、ゲームマスに止まったのと同じ効果があるんだ。ということは、さっきの大縄跳びみたいなゲームをするのかな?」

「ふふ……早くも雪辱の機会が来ましたか……！」

「あ、あの、華蓮さん? もう少し穏便に、というか、ゲームなんだから楽しく……」

「ええ、楽しく対決といきましょうか……！」

全然分かってきていない華蓮さんはカードを使い、マップを映していた画面が切り替わり、

「……『BISTRO ストップ』、って……なんかこう、物凄くどこかで聞き覚えが……」

「……変なランプの魔人が出て来ましたね。わたしが知っているあのテレビ番組には全然ないキャラですが……」

あまりにも急展開だったので、怒りに囚われていた華蓮さんもドン引いてクールダウンしていた。

変なキッチンスタジアムみたいところに「かれん」と「しろ」がいて、どうやらハンバーグを焼いて上に浮いているランプの魔人に食べさせるゲームらしかった。

「一度に食べさせられるのは三枚まで……お腹一杯になったら落ちてくるけど、それがいつなのかは分からない、かあ」

「賭けるのは体力、と言っていますが……あのスロットはなんででしょう?」

「倍率を決める、って言うてるから……食べさせたハンバーグの数に掛ける形で、ステータスがアップするんじゃないかなあ」

「なるほど、よく分かりました。肝心のゲームの方はあまり分かりませんが」

「うーん……とりあえずやってみれば分かるんじゃないかな?」

僕の言葉に、華蓮さんは「そうですね」と言ってボタンを押す。

「倍率は二人とも二倍……では、行きます。それっ」

「あー、いきなり三枚かあ。じゃあ僕も、っと……あれ?」

「……一枚目でいきなり落ちましたね?」

「たったの四枚で落ちるの?! というか、今の僕の勝ち目ゼロだよ!」

「……ご愁傷様です」

流石の華蓮さんも同情の声をかけてくれるけど、全然

納得出来ない。なんだろう、このやるせない気持ち……!

その後、中学、高校と順調に進学してからも凄まじい展開は続き――

「む、クラスのアイドルの体操服がなくなったと……同性ですし、わたしが犯人のはずはありま……ええっ!? どうしてわたしの机に?!」

「部活は、じゃあバスケット部に……あれっ? よろこびマスに止まったら、謎の外国人にサッカー部に入れられたよ!」

「ハートマス……なるほど、恋愛して結婚までいけということですね。ならば一番、お金を持っている人で……!」

「……僕も同じマスに止まったけど……なんかキャラが芸能人もじりで、性格アパーって……大丈夫なのかな、これ……」

高校卒業してからの進路選択で、二人とも進学を選び――

「わたしは勿論、一番レベルの高いゴージャス大狙いです!」

「でも華蓮さん、合格率20%って……」

「それだけあれば十分です。それっ……どうです、合格ですよ?」

「あれを一発で受かるってどんな運してるの……僕はアイ

テムで推薦状があるし、2番手の頭脳大学にしておくよ」「いいんですか、シロさん？ 一位と二位では雲泥の差ですよ？」

「僕も一発で受かりたいし、90%で受かるなら……えっ、嘘!? 一つしかない不合格に?!」

「……流石はシロさん、不幸が似合ってますね」

大学の後は就職で、そこでも人間性が表れて――

「働きたくはありませんが、仕方ありませんね」

「華蓮さん、ナースとかお姫さまとかあるよ？」

「なかなか魅力的ですが、やはりわたしにはもっと相応しい職があります。そう……儲かりそうな、医者か政治家で……!」

「……完全にお金目当てだよ……そういうゲームだけども……」

佳境になる社会人になってからは、足の引っ張り合いもあり――

「そういうえば『悪魔カード』を持っていたけど……あ、

他のプレイヤーの邪魔を出来るんだ？」

「そんな……シロさん、わたしにそんなものを使う気ですか？」

「えっ? でもほら、そういうゲームだし……」

「ここまで仲良く、切磋琢磨して進んできたというのに

……罪のないわたしに、悪魔のような所行を……酷いです……」

「だからこれはゲームだし……ああもう、いいよ、やらな

いよ」

「流石はシロさんですっ。……あ、わたし仕返しマスに止まったので、シロさんから能力貰うべく依頼しちゃいますね」

「あんなこと言った直後にどうしてそういうことするの?!」

「だってこういうゲームですから。ふふ、油断する方が悪いんですよ……あ、でも、一度使わないと言ったのでシロさんは無しですね。あつ、『超悪魔カード』も手に入れました! これは次のターンが楽しみですね……!」

最後の最後で、また一騒動あったり――

「そんな……ここまでできて、どうして『人生最後の賭け』に失敗してしまうんですか……?!」

「欲張って一番厳しい松コースを選ぶからじゃないかなあ。しかも華蓮さんの方が資産多かったのに」

「今のわたしならいけると思ったんですっ。うう、こんなあんなまりです……何もかも失ってしまいました……」

「僕も『最後の賭け』に着いたけど、これなら何もしくなくても――」

「……シロさん? シロさんはそのままつまらない終わり

を選ぶような人じゃないですよね?」

「えっ? いや、僕って物凄く安定志向だけど……」

「これはゲームですよ?! わたしが盛り上げようと不要な賭けに出たというのに、シロさんはやらないだなんて……そんなの、有り得ませんよね?」

「……や……それは……」

「やらないはず、ないですよねっ?」

「……う、梅コースでいい?」

「……」

「……竹でやります……」

「わあっ、流石はシロさんですっ。もう遅いですからね、聞いてしまいましたからね!? ふふ、そのまま何事も無くゴールすれば勝利確定だったでしょうに、甘い子もいたものですよ……!」

「……」

……とまあ、そんなこんなで。

見事に二人共賭けに失敗して開拓地送りで終了となり、結果発表を迎えた。

資金は互いにゼロだったけど、ステータスが高かったりゲームの勝ち数だったりでボーナスが入り、最終的に一位だったのは――

「やった、やりました! どうです、シロさん? やは

り最後に笑うのは正義のあるわたしでしたねっ」

「……まあ、うん……」

「色々ありましたけど、波瀾万丈でなかなか面白かったですね。勝因は日頃の行いが良かったからでしょうし」

よくあれだけダーティーな場外戦術をしまくってそんなことがいえるなあ、と一周回って感心してしまう。

それに、これだけ嬉しそうな顔を見てしまうと……なんだかんだで一緒にやって良かったなあ、と思う。実際、やっている間も楽しくそうだったし。

僕としても負けて少し悔しさはあるけど、この笑顔が見られたのなら、まあいいかなって感じた。

「……あれ? まだ何かあるみたいだよ。『振り返り』と『あなたの価値』だって」

「ふむ、『あなたの価値』とは気になりますね。シロさん、それを見てみましょう」

華蓮さんに言われるがままに進めてみると、画面では「人間レベル」と大きく書かれていて、

「へえ、ゲーム中にどれだけモラルのあるプレイをしたかで、人間レベルを動物に例えるんだ……?」

読み上げながら、あんまり意味が分からないので首を傾げてしまう。まあでも、このゲームには良くあることなのでもう気にしない。

まずは華蓮さんの人間レベルが出るようで、「わたしのことです、きっとミリアキヤットとかフェレットとかになるのでしょうね。さあシロさん、刮目して見ているといいですよ？ それっ」

「……………全く動かないで、「人間レベル0」だね」

「……………これは何かの間違いですっ。シロさんもやってみてください、きっとマイナスになるに違いありません……………」

「マイナスなんてないだろうけど……………」

促されてボタンを押してみると、僕の場合は結構画面が下にスクロールしていき……………レベル71のくじらで止まった。

「うーん、これって良い結果なのかなあ？ どう思う、華蓮さ——」

「決めました。今日の夕飯は鯨の缶詰にしましょう」

「露骨な嫌がらせがきたよ!? え、そんなに悔しかったの?」

「く、悔しくなんかありません！ そんな事実どこにもありません！ そんなこと言うシロさんとはもう一緒に遊んであげませんからっ」

そう言って頬を膨らませた幼馴染みのお姉さんは、ぶいっつとそっぽを向いてしまい。

僕は華蓮さんのご機嫌を直すのに、もう一苦勞する羽目になった。

——あと、これは余談になるけど。

後日、学校帰りに華蓮さんの家に行くと、度々PS2で『EX人生ゲーム』に興じる華蓮さんが目撃されて、「シロさんがどうしてもと言うなら一緒にやってあげてもいいですよ?」と誘われることが何度もあり。

楽しんで貰えるのなら良かったけど、絶妙に汚い戦術は変わらず人間レベルは0のままな辺りが、ちよつと華蓮さんらしかった。



—三— 魔物と棍棒検定 —

周防ツカサ

イラスト: 町村こもり

迷宮の主となった少年の《ラストダンジョン》防衛物語!
今回は新たな主力となる魔物を面接!?

「ぎゃあああああああああああ!?!」
その日、最後の冒険者がトラバサミと落石の罠のコンボにハマリ、絶叫を奏でた。

よし——

一部始終を玉座の間にある巨大な魔法の鏡で見ているおれは小さく拳を握った。

「本日の防衛終了つと。おつかれ、ロレッタ」

「サトル先生、お疲れさまです!」

小柄な少女が玉座に座るおれと笑顔でハイタッチを交わす。

ここは人間の世界と魔界を繋ぐ地下迷宮、その最深部

そして目の前の少女——ロレッタと言う——は夢召喚と呼ばれる、夜の間だけ望みの人物を召喚する一風変わった魔法で、現代日本で暮らすおれを人間と魔族が戦うこの異世界に呼び出した張本人であり、この魔族の最重要拠点、地下迷宮の管理代表でもある。

もともとこの地下迷宮はロレッタの父親である魔王が管理していたのだが、不幸な事故により魔王は逝去してしまい、それをきっかけに地下迷宮で働いていた配下の魔物たちはこぞって魔界に帰ってしまった。ロレッタの父親は人望がなかったらしい。

作品紹介

少年・サトルには二つの顔がある。昼は「少々」問題児の男子高校生。しかし、夜は魔王の娘・ロレッタによって召喚され、彼女を助けながら魔物や罠を駆使して冒険者たちから迷宮を守る「迷宮の主」。気弱で心優しいロレッタの住処を蹂躪せんとする、愚かな人間たちを駆逐するため、今日もサトルは、知略を巡らす——

成宮悟 (ナルミヤ・サトル)

ロレッタに召喚された、根は優しい学園の問題児。クールな知略とクレバーな悪知恵を駆使し、ロレッタを守りつづけるダンジョンにやってきた冒険者を駆逐している。

ロレッタ

魔王の娘。父親の死によって、冒険者たちに迷宮を蹂躪される日々を過ごしていたが、サトルの召喚に成功し、彼を師と仰いで共に迷宮運営を行なっている。

神宮寺理沙 (シングウジ・リサ)

現実世界でのサトルの知り合い。サトルとは逆に人間側に召喚され、強敵として立ち塞がるが、紆余曲折の末に捕虜となりメイドに。詳細は原作小説の1巻を読んでね!

一人ぼっちになってしまったロレッタは——だがめげることなく、父親に代わって地下迷宮を守ろうと奮闘した。しかし、気弱な彼女には人間を駆逐する知恵と勇気がなく——

そうした経緯を経ておれは夢召喚されたのである。

もっともロレッタが地球で暮らすおれをピンポイントに探し当てたわけではない。

夢召喚は召喚者の希望を叶える性質があるのだ。

ロレッタの願いは「ダンジョン運営に長けた人材を呼び出すこと」だったのだが、どういうわけかド素人のおれが選ばれてしまった。たしかにおれは学校で校長のズラを暴く仕掛けを作ったり、中学の頃も文化祭のときにアスレチックさながらのお化け屋敷を考案して「こんなお化け屋敷があつてたまるか!」と温厚な教師に突っ込ませたことがある。ダンジョン運営はやったことないけど、人を陥れる罠を考えるのは昔から得意なのだ。まー、世の中、狡賢い人間なんていくらでもいるわけで、そういうろくでもない人材の中からおれが選ばれた最大の理由ってのは、たぶんあいつのせい——なんだろうなあ……。

「あ、そうです。サトル先生、今日は面接の予定が入っています」

「ああ、新しいバイトの?」

「はいです」

父親の死をきっかけに一人ぼっちになってしまったロレッタには信頼できる家臣もいなければ下僕もない。地下迷宮はいつだって人材不足。だから定期的に求人広告を出して、この地下迷宮で働いてくれる魔物を募集しているのだ。

「では応接室に移動しましょう。そろそろ応募者のみなさんが到着する頃です」

「オーケー」

おれはロレッタと共に玉座の間をあとにした。

廊下に出ると——

「お、神宮寺」

「……………ふん」

メイド服を着た仏頂面の女と遭遇した。

「お前も面接官やんねー? きつと楽しいぞ?」

「……………興味ないわ」

ツンとした態度でおれから目をそらす。

まったく不機嫌なメイドだぜ。

まあメイドといってもおれが無理やりメイドやらせてるだけなんだけどな。

こいつは神宮寺理沙^①といって昼間——夢召喚が解除され

ているとき——おれと同じ高校に通っているクラスメイトである。魔族に夢召喚されたおれとは対照的に、人間サイドに夢召喚された神宮寺は多くの冒険者を率いる『霸王』の座にまで上り詰めたのだが、魔族との決戦

——つまりおれたちとの戦いに敗れ、今ではメイドとしてこの地下迷宮で働く身の上である。ちなみに神宮寺が着用しているメイド服は身体能力が大幅に制限される『呪い』の効果があるので反逆を企てることは不可能だ。あ、そうそう。さっきは名前を言わなかったが——おれがロレッタに夢召喚された最大の理由ってのがこいつ。

神宮寺はおれより先にこの世界に呼び出されたらしく……。あー、要はだな、神宮寺に対抗できるのは成宮悟しかない、と判断されたわけだ。ダンジョン運営を上手くやっていくことは人間のトップに立つ神宮寺を迎え撃てる人材でなければならぬから。

でまあ、実際、神宮寺を捕らえることに成功したわけ

で。適切な判断だったってことだな。

「……他に用がないのなら私行くから」

「メイドさん」おれは去っていく神宮寺の背中にわざとらしく声をかけ、「そこ埃落ちてるから掃除しとい

くれ。頼むわー」

「……キミがやりなさいよ」

「つれねー」

神宮寺は肩をいからせたまま去っていった。

なんて反抗的なメイドだ。調教か？ やはり調教が必要なのか？

「うーん。なかなか打ち解けてくれませんね、霸王さん」

「仕方ない。ついこの間まで敵同士だったんだから」

あいつが味方になってくれれば魔物なんて雇わなくてもなんとかなりそうだが——

いや、せっかく魔族を率いているんだからRPGの定番である火を噴くドラゴンとか、巨大な斧を振り回すミノタウロスとか、カッコいい魔物を従えたいよな。人材不足であるがゆえにこれまでは異主体で冒険者を撃退してきたけれど、異のアイデアは無敵じゃないからな。

しかも——

人間の世界には教会が生み出した『加護』と呼ばれる神秘の魔法がある。『加護』は死者を教会に転送し、即時復活を促す——まあ簡単に言ってしまうえばドラ○エの教会システムみたいなものだ。厳密には少し違うが、死んだ人間が生き返るのは同じである。

人間たちは倒しても倒してもゾンビのように蘇る……。

そして、復活するということは自分が引っかけた罠がどんなものなのか覚えているということ。

厄介なのはそれだ。

同じ冒険者を相手にすると、日々、新しい罠のアイデアを練らざるをえない。

だから屈強な魔物を雇うメリットは大いにあるわけだ。

「こんちやーっす。ふひっ」

最初に応接室に入ってきたのは身の丈二メートルはあろうかという全身緑色の人型の魔物だった。右手で釘付きの棍棒を握っている。たぶんオークだろう。面接に棍棒は必要ないと思うが、魔界の連中は常識がないヤツばかりなのでこの程度でいちいち突っ込んだりしない。

「魔界から来ました、下賤がウリのオークです。醜いなりですみません。ふひっ」

オークは半笑いで自己紹介すると、勝手に椅子に腰かけた。座った拍子にお腹の脂肪が三段腹を主張した。オークはかなりのほっちゃり系だった。ガタイがいいのはオークの特徴だと思うが、こいつはただ太っているだけのような気がする。

「えーと、ではまず志望動機からお願いします」

「志望動機ですか？」とオークは相変わらずの半笑いで、「自分ゲームが好きで、特に女騎士とかが出てくるRPGが好きなんすよ。やっぱオークに生まれたからには、高潔な女騎士を追い詰めて『くっ、殺せ！』とか言わせたいじゃないっすか？ だから今まで洞窟にこもってたんすよ。や、ほら、オークって森の中とか洞窟に棲んでるじゃないっすか？ で、魔物退治にやってきた女騎士を罠にハメるのが基本っすよ。でもそう都合よく女騎士なんてやってこないすよね。というか、本当に女騎士がやってきたら『それなんてエロゲ？』って話すすよね。で、まあ、人間がいっぱいやってくる地下迷宮だったら女騎士と遭遇する確率上がるかなと思っ、こうして面接に応募したんすよ」

「は、はあ……」

自分の趣味をひたすらまくし立てるオークに辟易したのか、ロレッタが困り顔で、「サ、サトル先生……何か質問を」とおれに助けを求めてきた。

ふむ。たしかにこういう手合いはロレッタ苦手そうだな。

しかし、このオーク……。

「オーク君、キミはなかなかいい趣味をしている」

「あ、わかります？ ふひっ」

「かく言うおれも女騎士を貶めることには命をかけていてね。きつとこの職場ならキミの希望を叶えられると思うよ」

「マジっすか！ ふひひっ！」

大喜びで棍棒を振り回すオーク。

危ないから、やめい。

「ロレッタ、どう思う？ おれは採用でいいと思うけど」「うーん……なんだかエッチな願望が見え隠れしているような……うーん」

「まあまあ。ほら、やる気があるのはいいことだと思っしよ」

魔界の連中は無気力なのが多いからな。このオーク、趣味がちよっとアレだが戦う気はあるようだし、それにオークってけっこう強いイメージがある。まあこの世界のオークがおれの抱くオークのイメージと同じとは限らないが。

「んっと、オークさん、一つ質問があるのですが」

「なんすかあ？」

「事前に送っていただいた履歴書を見ると、職歴に五年ほどの空白があるようですが、定職につかず五年間も何をしていたのですか……？」

「あー」

オークが初めて真顔になった。痛いところを突かれたのかもしれない。

「まさか五年間ずっと森の中とか洞窟で女騎士がやってくるのを待ってたのか？」

「そのままだったたりして」

と言いながらオークがまた半笑いで応じる。

「や、ほら、女騎士が来ないことにはオレの人生は始まらないわけで……」

「おいおい」

おれはロレッタが手に握っている履歴書を横から覗き見た……が、読めない。夢召喚の恩恵により言葉は理解できるようにになっている——全部日本語で聞こえる——のだが文字のほうはそうもいかない。今は勉強中の身の上なので代わりにロレッタに読んでもらった。

最終学歴——迷いの森オーク専門学校卒業。

志望動機——女騎士が（以下略）。

趣味・特技——ゲーム全般。

免許・資格——全国实用棍棒検定三級。

気になる点がないわけではないが、志望動機以外はわりとちゃんとしているな……。

「あのさ、全国实用棍棒検定三級って難易度的にどうなの？」

「あー、まー、専門学校出身の友達みんな持ってますね」

誰でも取れる検定ってことか。

「あー、あー」

「ん、まだなんかある？」

「……すみません。嘘つきました。友達はみんな二級とか一級とか取ってました。自分、運動とか苦手なんで三級以上はちよっと……」

「えー……」

「でもでも、三級でも立派ですよ。オークさんなりに頑張ったんですよ？」

エッチな願望が……とオークの採用に否定的だったロレッタだが、ここに来てオークをフォローし始めた。ロレッタらしい配慮である。敵である人間が異にかかったときでさえ、「トラウマにならなければいいのですが……」と相手の心配をするからな。たぶん言われなきや誰もロレッタが魔王の娘だとは思わねーよな。

「はは……所詮、自分なんて落ちこぼれのオークですよ。学校を卒業してから五年間、ずっと定職につかず女騎士を待ち続け……気づけば学生時代から体重が二倍に増加。学校に通っていたときは毎日振り回していた棍棒も今ではハエを払うときくらいしか使わないし、たぶん今棍棒検定受けたら悲惨な結果が待ってますよ。ふひひ

ひっ」

「…………ダメじゃん」

典型的なニートである。

やはりこいつの見事な三段腹はオークの標準体型によるものではなかったらしい。

学校卒業してからニートやってたってことは、きつと実戦経験ゼロだな。

「えつと、えつと……それではオークさん、最後に意気込みなどをお聞かせください」

ロレッタが最後の望みをかけて質問を投げかけた。

偉い。おれならこの時点で不採用を言い渡しているところだ。

「そうっすね。自分、女騎士のためなら減量することもやぶさかではありません。小生意気な女騎士を捕獲して自分の好みの雌奴隷に調教して、さらにさらに！ 女騎士の〇〇に××を△△したりなんかして！ ふひひひひひひっ——」

「も、もうけつこうです！ 本日はありがとうございますました！」

ロレッタが引きつった顔でオークの主張を遮った。

……あーあ。ドン引きだよ。せっかく最後にロレッタがチャンスくれたのに下ネタ連発するとかないわー。オーク君、正気か？ もうなんつーか、引きこもりだとかそう

いうの関係なくキモすぎた。これはさすがに不採用ですわ……。

「ニートを差別するつもりはないが、あのオークの社会復帰を手伝う気にはなれんな」

「えっと、えっと、とても個人的な方でした！」

「や、フォローしなくていいから」

たしかに個人的だったが、あれは口だけ達者で戦いで役に立たないタイプだぞ、きつと。

「うーん、こりゃ次も期待できそうにないな」

面接は一度にまとめてではなく随時行っていて、本日は二名と顔を合わせるようになってる。一名はさっきのオーク。そしてもう一名は———そういう誰が来るんだっけ？

「サトル先生。次の方は期待してもいいですよ？」

「お、自信ありげだね」

「ふふふ。もう一人は炎の召喚獣、イフリートさんなのです！」

「おお、イフリート！ メジャーどころが来たな！」

ファイールファンタジーなんかでおなじみの召喚獣だ。この世界のイフリートがどんな感じなのかは知らないが、ゲームの世界では引っぱりだこなキャラである。

———コンコン。

期待を膨らませていると応接室のドアがノックされた。どうやら噂のイフリートが到着したらしい。

きたぜー。やってきたぜー。

「どうぞお入りください！」

ロレッタが元氣よく返答するとまもなくドアが開いた。

「……あ、失礼します」

控えめに挨拶しながら中に入ってきたのは——

「ん？」「はれ？」

ヒゲを生やした小汚いおっさんだった。

「誰？」

「は、はい？」おれの質問におっさんがビクツと肩を震わせる。「わたくし……その、面接のお約束をしていたイフリートなのですが……？」

「嘘だー」

ありえねーよ。イフリートがこんな小汚いおっさんなわけ……。

「いやいやいや！ 嘘じゃありませんって！ ほら、これを見てください！」

そう言っておっさんが免許証サイズのカードを差し出す。すし、友達にも『熱いから消して』とウザがられますので……。

これを文字の読めないおれに代わってロレッタが確認した。

「本当です。名前の欄にイフリートと書いてあります……うん？ このカードは……」

———全国実用棍棒検定三級。

ロレッタがそうつぶやいたのを聞いて、

「あんたも棍棒検定三級かよ！」

と思わず叫んでしまった。

なんなの？ 魔界で棍棒検定流行ってるの？ 日本で言う普通自動車免許みたいなもの？

「これネタで取ったんですよ。合コンのときにこれ見せると『オークかよ！』って女子にバカ受けして盛り上がるんで」

「あんた本当にイフリートか？」

「イフリートさんと言えば筋肉ムキムキで全身が炎に包まれているはずですが……うーん、ちょっとイメージ違うかもです……？」

「ちょっとどころじゃないよ」

おれのイメージもロレッタとだいたい同じなのだが———目の前の男はさえない中年親父って感じの風貌だ。

「ああ……。わたくし、室内では炎をまとわないようにしているんですよ。やっぱり周囲に飛び火したら大変で

「イフリートさん？ 職歴に五百年の空白があるのは

とは———

それはまた難儀なことだ。

ん、待てよ？ 人間と契約しないようにしているってこと

と……

「……?」
「やっぱりお前もニートかよ!」

しかも今度は五百年とか。

スケールのでかいニートだなあ。

「えっとですね……今回、バイトに応募したのは嫁に「いい加減、働け。離婚するぞ」と脅されたことと、魔族と契約して人間と戦うようにすれば交友関係をぶち壊される心配がないってことに気づいたということ、あともう一つ……リハビリのためなんです」

「リハビリですか?」

ロレッタが問いかけると小汚いおっさん——もといイフリートが頷き、

「えーと……非常に言いにくいことなんです……その、長年炎をまとわない生活をしてきたからだと思うんですけど……」

嫌な予感がする——

もしかしてこのイフリート……。

「火力に自信がないと言いますか、ぶっちゃけロウソクに火を灯すので精一杯みたいなの?」

「ざけんな——っ!」

期待させるだけ期待させといて、これじゃあオークと一緒にじゃねーか。

おれは容赦なくイフリートに不採用を言い渡したのであった。

面接終了後——

「残念な結果に終わりました……」

「うちはニートの更生施設じゃないんだぞ、まったく」

もっと戦闘に特化した魔物はいないものか——

「ちょ、ちょっと、なんなのよ、あなたは!」

そのとき廊下で女性の金切り声が聞こえた。

この声はメイド(仮)の神宮寺だ。

「霸王さんの声です!」

「なんだなんだ?」

ロレッタと一緒に廊下に出ると、

「お願いです! お願いだから騎士装備でオークの森に来てください!」

「近寄らないで気持ち悪い!」

土下座スタイルで神宮寺に縋りつくオークの姿があった。

何やってんだ、こいつ……。

「絶対似合うから! 性格的にもビジュアル的にも!」

「なんの話よ!? バカじゃないの……っ!」

「それぞれ! そういう反抗的な態度が女騎士向きなんだよお!」

ああ——

神宮寺が自分の願望を叶えてくれそうなキャラだったから懇願してんのか。

「どうやらオークの琴線に触れたらしい……。」

「やっぱ雇わなくて正解だったな」

「オークさん……」

憐れむような目でオークを見つめるロレッタ。

「ちょ、ちょっと! 一人とも!? 見てないでこの魔物をどうにかしてちょうだい!」

「一度でいいから、一度でいいからオークの森にいいいい!」

……ホント、この世界の魔物連中は終わってんな。

あーあ。どっかにいい人材転がってないかなあ。

おれは呑気にそんなことを考えながら助けを求める神宮寺を傍観するのであった。

◆ 松下彩季 (まつしたあやき)

第19回電撃小説大賞に応募した短編が目にとまり、長編に改稿した「リピットと僕」で2013年9月に電撃文庫デビュー。小説家のほか、フリーライターとしても活躍している。

電撃文庫 リピットと僕



著・松下彩季
イラスト・春藤佳奈
好評発売中
定価：¥610（+税）

◆ 岬 鷺宮 (みさきさぎのみや)

2012年に「失恋探偵ももせ」で第19回電撃小説大賞の電撃文庫MAGAZINE賞を受賞。2013年に同作品で電撃文庫デビュー。2014年4月に「大正空想魔術夜話 墜落乙女ジェノサキド」を発売。

電撃文庫 大正空想魔術夜話 墜落乙女ジェノサキド



著・岬鷺宮
イラスト・NOCO
好評発売中
定価：¥570（+税）

◆ 夏海公司 (なつみこうじ)

2007年に「葉桜が来た夏」で第14回電撃小説大賞の選考委員奨励賞を受賞。2008年に同作で電撃文庫デビュー。2010年6月に「なれる!SE」第1巻を発売し、現在までに既刊11巻。

電撃文庫 なれる!SE



著・夏海公司
イラスト・マキ
11巻 好評発売中
定価：¥530～590（+税）

◆ 和ヶ原聡司 (わがはらさとし)

2010年に「魔王城は六畳一間!」で第17回電撃小説大賞の銀賞を受賞。2011年に同作を改題した「はたらく魔王さま!」で電撃文庫デビュー。最新作「0」巻が2014年9月10日発売。

電撃文庫 はたらく魔王さま!



著・和ヶ原聡司
イラスト・029
11巻 好評発売中
定価：¥570～610（+税）

◆ 泉谷一樹 (いずみたにかずき)

第17回電撃小説大賞を経て、2012年に「ブラックサンタとレインディア」で電撃文庫デビュー。2013年12月に「メイドが教える魔王学!」第1巻刊行、2014年8月9日に最新第3巻を発売。

電撃文庫 メイドが教える魔王学!



著・泉谷一樹
イラスト・しゅがすく
13巻 好評発売中
定価：¥630～650（+税）

◆ 周防ツカサ (すおうつかさ)

2004年に「インサイド・ワールド」で第5回電撃hp短編小説賞の大賞を受賞。同年に同作品で電撃文庫デビュー。2014年8月10日に最新刊「ラストダンジョンへようこそ」が発売。

電撃文庫 ラストダンジョンへようこそ



著・周防ツカサ
イラスト・町村こもり
好評発売中
定価：¥590（+税）

◆ 上月司 (こうづきつかさ)

2003年の第4回電撃hp短編小説賞応募を経て、2004年に「カレとカノジョと召喚魔法」で電撃文庫デビュー。主な著作は「れでい×ばと!」「アイドル×ヴァンパイア」など。

電撃文庫 れでい×ばと!



著・上月司
イラスト・むにゅう
全13巻 好評発売中
定価：¥490～570（+税）

電撃PS文庫

作家紹介

今回、電撃PS文庫に登場したのはこちらの7名。電撃文庫から発売されている既刊情報もあわせてチェック!